



慶應義塾大学ビジネス・スクール

青年 M ～経営者への道～

5

< 22 歳の岐路 >

彼が大阪で独立を決意したのは、22 歳のときだった。

威勢よく前職を退職し、独立したのは良かったが、起業に必要なものは何もそろっていない。電気製
品の生産・販売をする事業を起こそうとしていたのであるが、資金といえば、手元の貯金に前職の積立
金・退職金を足しても製造機 1 台の購入にも足りなかった。工場は当時生活していた借家の一部を使
うことにした。もちろん販売先の見当もついていない。あまりに無謀な 22 歳の挑戦だった。しかし、彼
自身は前途の光に身体中が奮っているように感じていた。

10

時は大正、青年の名は M といった。

15

前職は大阪の電力会社であった。そこでのサラリーマン生活は、決して不遇だったわけではない。
現業職の社員の中では、最高職種の検査員にも昇格していた。一緒に昇進した中で、最年少だった。
しかし、検査員は M が以前から憧れていた職種だったのだが、実際やってみると案外単調で、とりわ
け仕事の要領が良い M にとっては 1 日 3 ～ 4 時間で済んでしまう仕事であった。前の仕事に比べて
楽だったが、M は張り合いを感じられず、夢見ていたポジションに嫌気がさしてきた。

20

仕事に物足りなさを感じる中、帰宅後の彼には熱中している作業があった。会社で扱っている電気機
器「ソケット」に関心をもっていたのだ。“これはもっと良くなる”。彼は、独自に機器の改良を進めていっ
た。できた改良品を上司に見せたこともあったが、認めてはくれなかった。“上司は何もわかってない”、
M はそう感じた。

25

.....
このケースは討論用に松下幸之助の青年時代を題材として作成された。ケース本文では松下幸之助のことを「青年 M」と表記している。このことはケースの登場人物に対する授業参加者の先入観を減らし、議論を活性化させるためにケース作成者が意図的に行っている。本ケースを作成したのは高木晴夫・市村真納・菅野雅子・鶴ヶ谷典俊である。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学
ビジネス・スクール（〒 223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.
keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部
分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録
音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright © 高木晴夫、市村真納、菅野雅子、鶴ヶ谷典俊（2021 年 4 月作成）